

Sci., 7: 1077.

- 15) Kageyama, T. (1990): Multiplicity and development of monkey pepsinogens. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 61.
- 16) Nakamura, S., Minezawa, M., Gotoh, S., Yokota, A., Hashimoto, M., and Nigi, H. (1990): Naturally occurring pollenosis of Japanese monkey (*Macaca fuscata*). XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 93.
- 17) 中村 伸・市原啓子・関口清俊・村山裕一・千谷晃一 (1990): マクロファージ系細胞における Tissue factor の発現・生成機構. 日本薬学会第110年会. 講演要旨集 (生物化学部会), p. 47.
- 18) 中村 伸・村山裕一 (1990): 細胞表面における組織因子-VII因子相互作用. 第63回日本生化学会. 生化学, 62(7): 715.
- 19) 後藤 啓・中村 伸・水口 純・宮本誠二・獄本澄代・船津昭信 (1990): ヒト Tissue factor のモノクローナル抗体. 第63回日本生化学会. 生化学, 62(7): 963.
- 20) 水口 純・野崎周英・濱田福三郎・後藤 啓・宮本誠二・船津昭信・中村 伸 (1990): ヒト Tissue factor の cDNA のクローニング・発現. 第13回日本血栓止血学会. 日本血栓止血学会誌, 1(5): 449.
- 21) Asaoka, K. (1991): Some variations of protein expression in primates. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, pp. 61.
- 22) 浅岡一雄 (1990): ヒトのアシルCoA薬物代謝酵素. 第63回日本生化学会大会. 生化学, 62: 609.

系統研究部門

江原昭善・野上裕生・相見 満・瀬戸口烈司

研究概要

- 1) 東海地方から出土する人骨の研究

江原昭善・木下 実¹⁾

東海地方の発掘調査地から出土した人骨および獣骨, とくに頭骨を復原し, 比較検討をおこなっ

た。

- 2) 霊長類の歯の組織学的研究

野上裕生・相見 満

歯のエナメル質にみとめられる成長の周期を吟味し, 従来の5~7日周期の不合理性を指摘した。

- 3) インドネシアにおける第四紀霊長類の研究

相見 満

インドネシアの現生および化石霊長類の系統・進化・分類について, 詳細な研究をおこなった。

- 4) 南アメリカにおける第三紀霊長類の研究

瀬戸口烈司・高井正成²⁾・野上裕生

コロンビア国を中心に, 中新世の地層の発掘調査がおこなわれ, 保存良好な歯が多量に発見され, その系統的記載がなされている。

- 5) 南アメリカにおけるティティ属の形態学的研究

小林秀司²⁾・野上裕生

ティティ属の歯の形態に着目し, 属内種間変異とその進化的傾向を解析した。

論文

- 1) 近藤信太郎・瀬戸口烈司・茂原信生・永井廣 (1990): コロンブスモンキーにおける歯列弓の形態学的研究. 歯科基礎医学会雑誌, 32: 337-350.
- 2) Rosenberger, A. L., Setoguchi, T. and Shigehara, N. (1990): The fossil record of callitrichine primates. In: The Platyrrhine Fossil Record (eds. by Fleagle, J. G. and Rosenberger, A. L.), pp. 209-236, Academic Press, London.

報告・その他

- 1) 相見 満 (1990): 波入江207貝塚の動物たち. 郷土誌老津 (豊橋市立老津小学校郷土誌老津編集委員会編), p. 84.
- 2) 相見 満 (1990): 学名の話 (1) ヒト. モンキー, 231: 12-13.
- 3) 相見 満 (1990): 学名の話 (2) アイアイ. モンキー, 232: 13-14.
- 4) 相見 満 (1990): 学名の話 (3) ムーアモンキー. モンキー, 233: 12-13.
- 5) 相見 満 (1990): 学名の話 (4) 曲鼻亜目.

1) 文部技官

2) 大学院生

モンキー, 234: 10.

- 6) 相見 満 (1990): 学名の話(5)先取権について. モンキー, 235: 8-10.
- 7) 相見 満 (1991): なぜサルは北アメリカにいないのか. ワイドV: 生物の分布 (小野勇一・大島康行監修), pp. 18-19, 学研.
- 8) 相見 満 (1991): 樹冠にくらすサルは地上にはおらないのか. ワイドV: 生物の分布 (小野勇一・大島康行監修), pp. 70-71, 学研.

学会発表

- 1) Nakakuki, S. and Ehara, A. (1990): The bronchial tree, lobular division and blood vessels of the orang-utan lung, XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 25.
- 2) Suzuki, K., Miyake, K., Hayama, S. and Ehara, A. (1990): Comparative study of the gastric mucosa in primates. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., p. 100.
- 3) Sakaguchi, E., Suzuki, K., Kotera, S. and Ehara, A. (1990): Fibre digestion and digesta retention time in macaque and colobus monkeys. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 114.
- 4) Aimi, M. and Nogami, Y. (1990): Dental incremental markings in enamel of Japanese macaques. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 22.
- 5) Aimi, M. (1990): Morphology and distribution of Sumatran leaf monkeys. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 140.
- 6) Hartwig, W. C., Setoguchi, T. and Rosenberger, A. L. (1990): The emergence of modern platyrrhine genera. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 35.
- 7) Setoguchi, T., Takai, M. and Shigehara, N. (1990): A few Miocene primates from Colombia, South America and its implication for the phylogeny of platyrrhines. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., p. 36.
- 8) Takai, M. and Setoguchi, T. (1990) On the *Neosaimiri* - *Saimiri* complex; the status and the validity of the genus *Neosaimiri*.

XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 36.

- 9) Kobayashi, S. (1990): An analysis of interspecific relationship of the genus *Callicebus* based on cranial measurements. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 83.

ニホンザル野外観察施設

加納隆至(施設長・兼)・東 滋・
渡邊邦夫・足沢貞成¹⁾

本施設の運営は上記3教官のほか、和田一雄・鈴木 晃によって進められた。平成2年度の各ステーションの状況は次の通りである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは昭和23年以來の蓄積された資料のもとに、野外観察施設の中では独自の位置を占めている。ところが近年、宮崎日南海岸がリゾート法の地域指定を受けたことを契機に、幸島近辺でもいろいろな観光開発の動きが出てきている。特に昨年の冬頃から、一部の渡船業者が幸島のサルに餌を与え、ひどいときには海中に餌を撒いて、サルに水泳をさせるということをするようになった。各方面からの協力を得て、夏には何とかやめさせることができたが、幸島対岸に舟溜りができたこともあって、観光客の数ははるかに多くなっている。関係各官庁とも連絡をとり、今後の対策を検討中である。また串間市内の一部有志を中心に、宮崎県と串間市の協力を仰いで、幸島自然保護センターをつくらうという動きも出てきている。今後、注意深い対応が必要になろう。

今年(平成2年)も春から夏にかけて、島が堆積した砂によって地続きになり、サル番を出す日が多かった。秋に台風がきてこの状態は解消されたが、舟溜りをつくったために幸島との間の突堤が以前より高くなっており、完全には堆積した砂を流しきれないようである。従って日中に潮の低くなってきた平成3年3月の時点では、すでにかなり水深の浅いところできており、平成3年度にもやはりサル番が必要となろう。平成元年3月の時点での島内の個体数はマキグループ13頭を

1) 教務補佐員